

妻アイデンティティと夫婦関係

1. はじめに
2. データ
3. 社会的属性と主要変数の関係
4. 役割アイデンティティと夫婦関係の変化
5. 結 論

永 井 暁 子*

要 約

本論はライフステージの移行にともなう夫婦関係の変化に注目し、有配偶女性の妻アイデンティティについて明らかにするものである。妻アイデンティティの規定要因を明確にするために、母アイデンティティ・主婦アイデンティティの規定要因と比較する。

母アイデンティティと主婦アイデンティティはライフステージの直接的な影響がみられた。子供が幼い時期には母アイデンティティは重要視され、子供の成長にともない重要視されなくなる。また夫婦に子供が誕生することにより家族は集団的になる。そして妻は主婦の役割アイデンティティを重要視する。妻アイデンティティはライフステージから直接の影響は受けていない。同伴性、妻と夫の情緒・評価的サポートが高いほど、妻アイデンティティは高くなる。ライフステージの移行によって、とりわけ夫婦のみのステージから乳児をもつステージの移行によって夫婦関係が悪化した場合、妻アイデンティティの重要性は低くなる。

1. はじめに

今日の有配偶女性は何から精神的安定を得ているのであろうか。夫婦関係について多くの研究やドキュメントがだされているが、その中にはライフステージの移行による夫婦関係の悪化に注目したものも多い。それらにおいては第一子の出産によって夫婦関係が子供を介した関係でしかなくなってしまう、その結果、子供が成長したときに夫婦関係がうまく取れないというようなケースが

とりあげられている。また、出産による夫婦関係の緊張は子供が生まれる以前の夫婦関係の特質と関係があり、危機を乗り越えやすい夫婦とそうではない夫婦がいるといわれている。また乗り越えにくい夫婦の場合でもなんらかのきっかけから、夫婦関係が変化し危機を乗り越える夫婦もいるという (Belsky and Rovine, 1990)。つまりライフステージの移行の影響を受けながらも、夫婦関係の在り方によって夫あるいは妻がどのように自己を形成していくかが重要なのである。

自己は役割アイデンティティのセットとして考

*東京都立大学大学院社会科学研究所 (博士課程)

えられ、役割アイデンティティとは相互行為の中で形成されるものであり、個人が各役割に対して抱く自己観である。この様な役割アイデンティティは個人の中で構造化されている (McCall and Simmons, 1966)。また、Thoits はアイデンティティの累積が精神状態をよい方向へ導いていると述べている (Thoits, 1983)。つまり役割アイデンティティは社会関係の中で形成され個人の精神状態に影響する。有配偶女性について考えてみると、夫婦関係の中で妻アイデンティティが形成された場合、それは妻の精神状態をよい方向へ導くと考えられるのである。

本稿の目的は、有配偶女性に精神的安定をあたえるであろう妻アイデンティティが、いかなる夫婦関係によって形成され支えられているかについて明らかにすることである。夫婦関係として夫から妻への情緒・評価的サポート、妻から夫への情緒・評価的サポート、夫の家事遂行、レジャー同伴性をとりあげ、これらが高いほど妻アイデンティティは高くなると考えられる。また、有配偶女性は家庭内のその他の役割として母役割、主婦役割をもっている。他の2つの役割との比較を行うことによって、妻アイデンティティはより明らかになるであろう。

2. データ

(1) データの収集

1993年12月に調布市において郵送によるアンケート調査を行った。調布市の選挙人名簿より、25歳以上44歳以下の有配偶と思われる女性を無作為に抽出した結果、40～44歳512名、35～39歳432名、30歳～34歳489名(うち親同居と思われる者78名)、25歳～29歳407名(うち親同居126名)の1840名が対象者となった。調布市の年齢別での有配偶者の親との同居率と比較すると、サンプリングした者の中では25歳から34歳にかけての層で親と同居しているとみられるものの比率が非常に高かったため、サンプル全体の構成を母集団での有配偶同居者の割合に近づけるように、一度抽出されたサンプルのうち、30歳～34歳で親と同居している

78名の中から48名を、25歳～29歳で親と同居している126名から36名を無作為に抽出し、最終的には1720名を調査対象者とした。回収の結果、35名は転居など宛先不明、42名は無配偶者であり非該当であったため、1643名が今回の調査の実質的な対象者数である。回収票数は822票、従って回収率は50.0%である。集計・分析にあたっては、職業・ライフステージについて完全に記入されていない票を除き、807名の調査票のみを用いている。

(2) 回答者の属性

回答者の年齢は20歳代後半16.4%、30歳代前半27.1%、30歳代後半25.6%、40歳代30.9%、回答者の夫の年齢は20歳代前半0.4%、20歳代後半8.3%、30歳代前半23.3%、30歳代後半22.6%、40歳代前半24.5%、45歳以上20.9%であった。

回答者の最終学歴は中学2.9%、高校29.7%、専門学校12.8%、短大・高専26.6%、大学以上27.9%、その他0.1%であった。配偶者の最終学歴は中学4.8%、高校21.2%、専門学校7.6%、短大・高専3.4%、大学以上63.0%と、短大・高専卒業以上の者が回答者で57.5%、配偶者で68.6%を占め高学歴である人が多いといえる。

回答者のうち約半数の51.8%が無職である。常勤は14.7%、パート・臨時19.7%、自営・自由業は10.6%、内職2.6%、その他の形態で働いている者は0.6%であった。配偶者のうち約8割は常勤で勤めている。パート・臨時1.0%、自営・自由業18.3%、その他の形態で働いている者は0.7%、0.5%が無職であった。

職種については現在職業についていると回答した者の中の割合を示した。専門職についている者が29.6%、管理2.1%、事務34.2%、販売19.8%、サービス6.4%、労務4.1%、その他の職種の者が3.9%であった。配偶者は専門職23.9%、管理29.1%、事務18.2%、販売12.7%、サービス2.9%、労務7.7%、その他の職種の者が5.5%であった。

回答者のうち38.9%は収入がない。税制上の被扶養者の範囲内である年収120万円未満の者は27.0%、120万円を超えるものは34.1%であった。年収が500万円を超えるものは1割にとどまっている。回答者および配偶者、その他の収入を含め

た世帯の年収は400万円未満4.3%、400万円以上600万円未満19.1%、600万円以上800万円未満29.4%、800万円以上1000万円未満20.4%、1000万円以上1500万円未満21.7%、1500万円以上5.2%であった。

回答者のみの世帯0.1%、回答者と配偶者の世帯は19.1%、それに子供を加えた世帯68.3%、回答者と子供だけの世帯0.9%であり、核家族が大多数を占める。親との同居は11.6%と全体の1割ほどであった。

ライフステージについては子供のいない世帯が19.4%、子供がいる世帯の中で末子の年齢について述べると、3歳未満の子供がいる世帯は25.0%、3歳以上6歳以下19.5%、7歳以上12歳以下22.4%、13歳以上13.6%であった。

3. 社会的属性と主要変数の関係

(1) 方法

ライフステージ（夫婦のみ、末子0～2歳、末子3～6歳、末子7～12歳、末子13歳以上）、妻・夫の学歴（中学・高校、専門学校・短大・高専、大学・大学院）、妻の就業形態（無職、パートタイム、フルタイム）、夫の就業形態（自営か否か）、世帯年収、妻・夫の年齢の8変数を社会的属性変数として用いた。主要変数はレジャー同伴行動、夫の家事分担、夫と妻の情緒・評価的支持、役割アイデンティティ（妻・母・主婦）の7変数である。レジャー同伴行動には「ショッピングに行く」、「旅行やドライブに行く」、「夫婦ぐるみで、友人を招いたり、招かれたりする」、「共通の趣味（音楽・スポーツ・映画）を楽しむ」の4項目それぞれについて、「ほとんどない」を1点、「たまにある」を2点、「よくある」を3点とし、4項目の加算尺度を用いた。夫の家事分担は「料理・あとかたづけ」、「風呂の準備・掃除」、「洗濯」、「掃除」、「ゴミだし」の5項目についてそれぞれ「まったく行わない」を1点、「たまに行う」2点、「ときどき行う」3点、「しばしば行う」4点とし合計した。夫婦の情緒的・評価的支持については以下の各4項目についてたずねた。夫から妻への

サポートとしては、「夫は、わたしの心配ごとや悩みを聞いてくれる」、「夫は、わたしの能力や努力を高く評価してくれる」、「夫は、わたしに助言やアドバイスをしてくれる」、「夫はわたしの気持ちや考えを理解してくれる」である。妻から夫へのサポートとしては「わたしは、夫の心配ごとや悩みを聞いてあげている」、「わたしは、夫の能力や努力を高く評価している」、「わたしは、夫に助言やアドバイスをしてあげる」、「わたしは、夫の気持ちや考えを理解している」である。それぞれについて「あてはまらない」1点、「あまりあてはまらない」2点、「ややあてはまる」3点、「あてはまる」4点とし加算尺度とした（ $\alpha=.87$ 、 $\alpha=.79$ ）。母アイデンティティ、妻アイデンティティ、主婦アイデンティティは「子に対して母であること」、「夫に対して妻であること」、「一家の主婦であること」という質問項目に対しそれぞれ「あまり重要ではない」1点、「どちらかといえば重要でない」2点、「重要である」3点、「非常に重要である」4点の4検法でたずねた。

まず、主要な変数である夫の家事遂行、夫婦同伴のレジャー行動、夫から妻への情緒・評価的支持、妻から夫への情緒・評価的支持、母アイデンティティ、妻アイデンティティ、主婦アイデンティティと有意な関係があった社会的属性変数を取りだした。

(2) 結果

まず主要変数の単純集計について述べる。夫の家事参加は5点つまり全ての項目において「全く行っていない」と答えた者が136人（17.6%）、6～7点203人（26.3%）、8～9点175人（22.7%）、10～11点130人（16.8%）、12～13点93人（12.1%）、14～15点34人（4.4%）である。有職の妻は5割程度であり、また無職の妻の多くは乳幼児を抱えているにもかかわらず、全体の2割近い夫は何も家事を行っていない。

夫からの情緒・評価的支持は4～7点95人（11.9%）、8～11点229人（28.5%）、12～15点381人（47.7%）、16点95人（11.9%）、妻からの情緒・評価的支持は4～7点36人（4.6%）、8～11点267人（33.9%）、12～15点419人（53.6%）、16

点62人(7.9%)である。妻からのサポートよりも夫からのサポートの方が分散している。

役割アイデンティティについては母アイデンティティ1~2点30人(4.6%)、3点187人(28.6%)、4点436人(66.8%)、妻アイデンティティ1~2点163人(20.3%)、3点324人(40.3%)、4点316人(39.4%)、主婦アイデンティティ1~2点239人(30.1%)、3点335人(42.2%)、4点219人(27.6%)である。母アイデンティティは子供がいる者のみを対象としているのだが、他の役割アイデンティティに比べて非常に重要であるとしているものが多い。

レジャー同伴性は4~5点112人(13.9%)、6~7点241人(20.0%)、8~9点261人(32.5%)、10~12点190人(23.6%)である。

次に主要変数と属性変数との共分散分析のそれぞれの結果では、母アイデンティティはライフステージと妻の学歴との関連がみられた($F=8.69$ $R^2=0.08$ $P<.001$)。子供の年齢が低いほど高く、子供の成長とともに低くなる。また、妻の学歴が高いほど母アイデンティティは高くなる。

主婦アイデンティティはライフステージと妻の就業形態との関連が見られた($F=7.64$ $R^2=0.06$ $P<.001$)。夫婦のみのライフステージで最も低く、子供の成長とともに高くなっている。妻の就業形態との関連では、妻が無職である方が主婦アイデンティティは高い。

妻アイデンティティはライフステージと妻の学歴との関連がみられた($F=4.10$ $R^2=0.04$ $P<.001$)。夫婦のみのライフステージで高く、子供の誕生とともに低くなる。妻の学歴が高いほど妻アイデンティティが高く、夫が自営業についているほど妻アイデンティティは低い。

夫の家事遂行に関してはライフステージ、妻の学歴、妻の就業形態との関連がみられた($F=20.51$ $R^2=0.21$ $P<.001$)。夫婦のみのステージの夫は他のステージの夫よりも家事を行う者が多く、妻の学歴が高いほど夫は家事を行う。また、妻がフルタイムで働いている場合に夫は家事を行う者が多い。

夫婦同伴のレジャー行動はライフステージと妻

の学歴との関連がみられた($F=13.83$ $R^2=0.15$ $P<.001$)。ライフステージが夫婦のみである場合に同伴のレジャー行動が高く、妻の学歴が高いほど、夫の学歴が高いほど同伴のレジャー行動が高い。

夫から妻への情緒・評価的サポートはライフステージとの関連がみられた($F=14.07$ $R^2=0.07$ $P<.001$)。夫のサポートは夫婦のみのライフステージで高く、ライフステージがあがるほど夫のサポートは少なくなる。妻から夫への情緒・評価的サポートはライフステージと夫の学歴との関連がみられた($F=6.65$ $R^2=0.06$ $P<.001$)。夫からのサポートと同じように、夫婦のみのライフステージの場合にはサポートが多く、ライフステージがあがるほどサポートが少なくなる。妻からのサポートは夫の学歴とも関連があり、夫の学歴が高いほど妻からのサポートは多くなる。

(3) 考察

概して家庭内役割のどの役割アイデンティティにもいえることだが、とくに母役割については役割アイデンティティの位置づけが高い者が多い。母アイデンティティの強さは、ライフステージによって、いかえれば子供の成長段階によって異なっている。子供がサポートを必要とするほど、母アイデンティティは重要性を増すのだろう。妻の学歴の効果を解釈すると、学歴が高い妻ほどライフステージの上昇にもかかわらず子供へのサポートが必要であると考えがちで、その結果、母アイデンティティが強くなるのではないだろうか。母アイデンティティは子供のサポートのニーズ、正確には妻が認知するニーズに依存する。

主婦アイデンティティはライフステージの上昇とともに強くなる。主婦役割は集団的役割であり、夫婦のみであった家族が子供の誕生によってより集団的性質を帯びることから、主婦アイデンティティの位置づけが高くなると考えられる。妻が無職である方が、主婦アイデンティティが高いということは、夫婦間の分業が明確である方が主婦アイデンティティを高くすることを意味するだろう。従って、夫の家事遂行とも関連があるかもし

れない。

妻アイデンティティは妻の学歴が影響していた。妻の学歴の影響についての解釈には高学歴女性の意識が妻アイデンティティを高く位置づける可能性、つまりここでは扱っていないなんらかの変数を媒介とした影響がある可能性と、妻の学歴と有意な関係が見られた夫婦同伴のレジャー行動や夫の家事遂行を媒介としている可能性がある。

どの役割アイデンティティもライフステージとの有意な関係がみられた。しかしライフステージは夫婦同伴のレジャー行動、夫の家事遂行、夫と妻双方の情緒・評価的サポートとも有意な関係にあるために、これら4つの変数を媒介としていることが考えられる。つまりライフステージの移行によって夫婦同伴のレジャー行動、夫の家事遂行、夫婦間のサポート関係が変化することにより役割アイデンティティが変化している可能性がある。主婦アイデンティティやとりわけ母アイデンティティは家族成員の変化と関連すると考えられるためライフステージに影響される可能性が高いけれども、妻アイデンティティは夫との関係の中で形成される、あるいは維持されるはずであり、ライフステージの効果は疑似相関である可能性が高いと考えられる。

次にライフステージにおいてみられた役割アイデンティティの要因を明確にするために、主要変数間の関係について有意な関係のあった社会的属性変数を含めて分析する。

4. 役割アイデンティティと夫婦関係の変化

(1) 方法

ここでの分析はまず役割アイデンティティ間の関係を相関分析で概観し、次に役割アイデンティティを従属変数とし、その他の主要変数(夫の家事遂行、夫婦同伴のレジャー行動、夫から妻への情緒・評価的サポート、妻から夫への情緒・評価的サポート)を独立変数として共分散分析を行った。共分散分析を行った際には、各役割アイデンティティと有意な関連があった属性変数をコント

ロールしている。

(2) 結果

各役割アイデンティティはそれぞれ有意な相関関係にある。母アイデンティティと妻アイデンティティは正の相関関係にあった($r = .43$ $P < .001$)。また、妻アイデンティティと主婦アイデンティティ、主婦アイデンティティと母アイデンティティも同様に正の相関関係にあった($r = .38$ $P < .001$, $r = .38$ $P < .001$)。

表1の共分散分析の結果をみると、妻アイデンティティは夫が自営業の場合には重要視されない。夫から妻への情緒・評価的サポート、妻から夫への情緒・評価的サポート、レジャー同伴行動が高い場合に重要視される。一方、夫の家事遂行と間に関連はみられなかった。

表1 妻アイデンティティに関する共分散分析

	F値
ライフステージ	1.54
妻学歴	1.71
夫就業形態(自営業か否か)	5.60*
レジャー同伴行動	6.10**
夫の家事遂行	2.17
夫からの情緒・評価的サポート	9.40**
妻からの情緒・評価的サポート	24.38**

$n = 758$ $F = 17.11$ $P < 0.001$ $R^2 = 0.22$

Mean 3.13 ** $P < 0.01$ * $P < 0.05$

母アイデンティティは平均値が3.60と高く、他の役割アイデンティティよりも重要視しているものが多い。また子供が幼いほど重要視され、末子が6歳以下とそれ以上との間、末子が12歳以下とそれ以上との間に有意な違いがみられる。回答者の最終学歴が高校以下である場合に重要視されない(表2)。

主婦アイデンティティは平均値が2.83であり3つの役割アイデンティティの中で最も低い値をとっている。主婦アイデンティティは夫婦のみのライフステージと末子が0~2歳の間に違いがみられ、子供が大きくなるにつれ重要視される。ただし末子が13歳以上になると主婦アイデンティ

表2 母アイデンティティに関する共分散分析

	F値
ライフステージ	9.00**
妻学歴	5.01**
レジャー同伴行動	1.84
夫の家事遂行	0.79
夫からの情緒・評価的サポート	0.60
妻からの情緒・評価的サポート	0.08

n = 608 F = 5.55 P < 0.001 R² = 0.09
Mean 3.60 **p < 0.01 *p < 0.05

ライフステージ	末子0～2歳	3.75
	末子3～6歳	3.66
	末子7～12歳	3.56
	末子13歳以上	3.37
妻学歴	中学・高校	3.44
	専門学校	3.60
	短大・高専	3.67
	大学	3.63

表3 主婦アイデンティティ役割に関する共分散分析

	F値
ライフステージ	6.67**
妻就業形態	1.60
レジャー同伴行動	0.33
夫の家事遂行	6.04*
夫からの情緒・評価的サポート	1.13
妻からの情緒・評価的サポート	5.54*

n = 756 F = 5.89 P < 0.001 R² = 0.08
Mean 2.83 **p < 0.01 *p < 0.05

ライフステージ	夫婦のみ	2.43
	末子0～2歳	2.88
	末子3～6歳	2.88
	末子7～12歳	2.99
	末子13歳以上	2.72

ティも多少重要視されなくなる。また、夫の家事遂行が少ないほど、妻が夫に情緒・評価的サポートを行っているほど重要視される(表3)。

(3) 考察

母アイデンティティの位置づけは、本論で変数として用いた範囲内での夫婦関係をあらわす指標とは有意な関係が見られなかった。つまりライフステージと妻の学歴によって規定されている。

主婦アイデンティティにもまた、ライフステー

ジそのものの効果があったと考えられる。妻の就業形態の効果、つまり妻が無職か否かにあられる違いは、夫の家事遂行の効果による疑似相関であった。つまり妻が就業しているか否かにかかわらず夫の家事遂行との関係だけが主婦アイデンティティに影響を与えている。このことから考えられることは、主婦アイデンティティの位置づけの高さは夫と妻の分業の明確化がもたらした結果ではない。また夫のサポートとは関係なく妻がサポートしていることのみが主婦アイデンティティの位置づけを高くしていることと考え合わせると、妻の家庭内での孤立した状況を表していると考えられる。

そして妻アイデンティティに対してみられたライフステージの効果は、夫から妻への情緒・評価的サポート、妻から夫への情緒・評価的サポート、夫婦同伴のレジャー行動によるものであった。妻アイデンティティの変化はライフステージの移行自体によって変化するのではなく、ライフステージの移行にともなう夫婦関係の変化によって規定されると考えられる。しかし夫が自営業であることとの関係はなぜだろうか。自営業の方が伝統的であるという解釈ならば、学歴と結びつきやすいと考えられるが、そのような関係はなかった。

5. 結論

母アイデンティティと主婦アイデンティティはライフステージによって変化していた。子供が幼い時期には母アイデンティティは重要視され、子供の成長にともない重要視されなくなる。また夫婦に子供が加わり、2者関係から3者関係になることにより家族は集団的性質を帯びる。それゆえ、妻は集団的役割である主婦の役割アイデンティティを重要視するのだろう。これらの役割アイデンティティの位置づけに対するライフステージの移行の影響は、家族成員数や家族成員のニーズの変化の影響であると考えられる。

主婦アイデンティティに関してみると、いわゆる近代家族論にあられる主婦とは異なっているように思われる。夫が家事をしないことが主婦ア

アイデンティティを重要視する要因となっているが、妻が専業主婦であることは要因とはなっていない。つまり主婦アイデンティティの位置づけの規定要因は、家庭内と外との夫婦間の分業形態の明確化ではない。パートタイムでの就労が主婦労働の一部として行われていると指摘されてもいるが、フルタイムで就労している者とパート・無職の者との間にも差がないことから、主婦アイデンティティの位置づけが高い女性は主婦労働として職についているとはいえないだろう。また、情緒・評価的支持関係については、妻から夫へのサポートのみが要因となっている。家庭内役割を重要視しながらも夫からの手段的支持（家事分担）はなく、情緒的・評価的支持も必ずしもあるわけではない場合に主婦アイデンティティが高まっている。

妻アイデンティティは母・主婦アイデンティティとは異なり、ライフステージからの直接の効果はなく、夫との関係がなければ成り立たない。1時点の調査であったという限定はあるものの、ライフステージの間接的な関係を考慮すると、ライフステージの移行にともない夫婦関係が変化し、妻アイデンティティを損なった妻もいると推測されるのである。しかし逆に夫婦関係の妻アイデンティティに対する直接的な効果に着目するならば、結婚当初、妻アイデンティティが形成されなかった妻に関しては、夫婦関係の改善によって形成された場合もあるだろう。

行動を共にするレジャー同伴性、妻と夫両方の情緒・評価的支持があることが妻アイデンティティの形成・維持には必要である。つまり夫

婦関係の中で妻アイデンティティは形成・維持されていたといえよう。

妻アイデンティティが低い妻は結婚当初から低かったのか。逆に高い妻は結婚当初から高かったのか。そうでないならそれらはなんらかのきっかけで夫婦関係が変化し、妻アイデンティティに影響を及ぼしたのか。その原因とはなんだろうか。これらは今後の課題である。

付 記

本研究は東京都立大学都市研究所における共同研究「大都市の地域経済構造の変化に対応した環境の保全に関する総合的研究」の成果の一環である。なお、本研究に当たり、共同研究者である石原邦雄（東京都立大学）、稲葉昭英（淑徳大学）、野沢慎司（静岡大学）、藤崎宏子（聖心女子大学）の諸氏との共同作業に多くを負っていることをお断りしておきます。

参 考 文 献

- Belsky J. and Rovine M. (1990) "Patterns of Marital Change across the Transition to Parenthood :pregnancy to three Years Postpartum", *Journal of Marriage and The Family* 5-19.
- McCall,G.S. and Simmons,J.L. (1966) *Identities and Interaction*, Free Press
- Thoits P.A. (1983) "Multiple identities and psychological well-being : A reformulation and test of the social isolation hypothesis", *American Sociological Review*, vol.48, 174-187.

Key Words (キー・ワード)

Wife-identity (妻アイデンティティ), Marital Relation (夫婦関係), Companionship (同伴性), Life stage (ライフステージ)

Wife-identity and Marital Relation

Akiko Nagai*

*Graduate Student, Tokyo Metropolitan University
Comprehensive Urban Studies, No.56, 1995, pp.113-120

Focusing on the change of marital relation with the transition of life stage, this paper is intended to explain married women's wife-identity. To prove the defined factors of wife-identity, it is compared with those of mother-identity and housewife-identity.

The married women's mother-identity and housewife-identity are affected directly by life stage. Where children are babies or infants, the married women attach importance to mother-identity. The older children grow, the less important mother-identity is considered to be by married women. Moreover the birth of babies make couples feel group-minded. So that, married, become to women attach importance to housewife-identity. But the life stage has no direct effect on wife-identity. The higher the level of companionship and their emotional/evaluative supports are, the more important wife-identity is considered to be by wives and husbands. The levels of companionship and their emotional/evaluative supports are affected by the transition of life stage. In short, if marital relation changes worth with the transition of life stage, especially from no child to having a baby, the level of importance of wife-identity becomes lower.